

# 「写真の町」情報館

## INFORMATION

歴代総理大臣「宰相列伝」写真展大盛況で終了。

歴代総理大臣16人の素顔の表情を撮り収めた「宰相列伝」写真展は、4月24日から5月9日までの日程の間、延べ2,219人の入館者を記録し、大盛況のうちに終了しました。

この写真展は、東川町開拓110年および写真の町20年を記念して開催したもので、写真展には小泉純一郎内閣総理大臣から生花と祝電をいただきました。この他にも中曽根康弘、海部俊樹元総理大臣や内閣官房長官始め、国会議員や旭川市長などから祝電が贈られるなど、本町開催の写真展としては、格別で大変名誉な写真展でした。



### 写真甲子園参加生徒の言葉



写真左から  
坂本先生・森山真由美さん・  
増田美絵さん・山本理沙さん

昨年の第10回写真甲子園に参加した選手たちの感想を文集から抜粋してお知らせします。

～写真甲子園は、私が思っていたより先大変でした。1日目は朝から雨が降っていて、三脚やカメラの持ち運びが大変でした。2日目は晴れていたのでも、楽しく撮影できました。第1ステージのテーマは、『水稻発祥の地』の碑を読んで決めました。地味なテーマで、戦いには不利でしたが、私たち農業高校生としては避けて通れないテーマです。私たちは、薄明の水田に佇み、先覚者の苦勞を想いました。テーマの発表では、覚えたはずの原稿が出てきませんでした。

大変な思いをしましたが、今では良い思い出です。短い間だったけど、とても楽しく撮影に取り組み、大変なことあったけど、がんばることができました。

私たちが北海道でがんばることができたのは、写真甲子園に協力してくださった皆さんのおかげです。東川町の皆さん本当にありがとうございました。

愛媛県立大洲農業高等学校 1年 森山 真由美

写真家中川裕次さんよりお礼のメッセージをいただきました。

5月11日から30日まで文化ギャラリーで開催された、戦争の傷跡が残るカンボジアクメールの人々をテーマにした「クメールの人々...片隅に生きる庶民の肖像」展の写真家中川裕次さんよりお礼のメッセージをいただきましたので紹介します。

.....

出発点としての東川町「クメールの人々...片隅に生きる庶民の肖像」展を終えて。

「伝えてくれ、俺たちのことを。地雷原の生活がどんなものかを」

片足の古びた義足を引きづるようにして近づいてきた男性が、訴えかけるようにいった。長い内戦は地雷や貧困など膨大な負の遺産を遺したまま終結した。世界の注目が離れていくなか、取り残された人々は、貧困と地雷の恐怖などで過酷な生活を強いられている。

アジア・アフリカ・中南米など長い放浪の末にカンボジアの人々と出会った。すべての人生を戦争に翻弄されてきた人々のやり場のない怒りや悲しみの目に触れたとき、放浪中常に胸に秘めてきた「さまざまな状況下の人々の姿を写真で表現し、日本に伝えたい」という思いが一気に噴出した。

発表の機会を模索していた昨年4月、知人の紹介で「写真の町」東川町との出会いに恵まれた。長く世界中を放浪していたわたしにとって、大雪を眼前に望む雄大な自然とあたたかい人々のこころ遣いが胸にしみた。

文化ギャラリーで初めての個展を開くことができ、これが写真家としてのデビュー展となった。町民の皆様から多くの励ましのお言葉と勇気をいただいた。それを励みに再びカンボジア取材して歩き、その成果を今年再び東川町で発表することができた。東川町は私の写真家人生の出発点としてかけがえのない心のよりどころ

となった。

写真家  
中川裕次

